

第3節 鹿島台遺跡周辺における弥生時代中期前半期の諸様相

1. 中期前半期の土器について

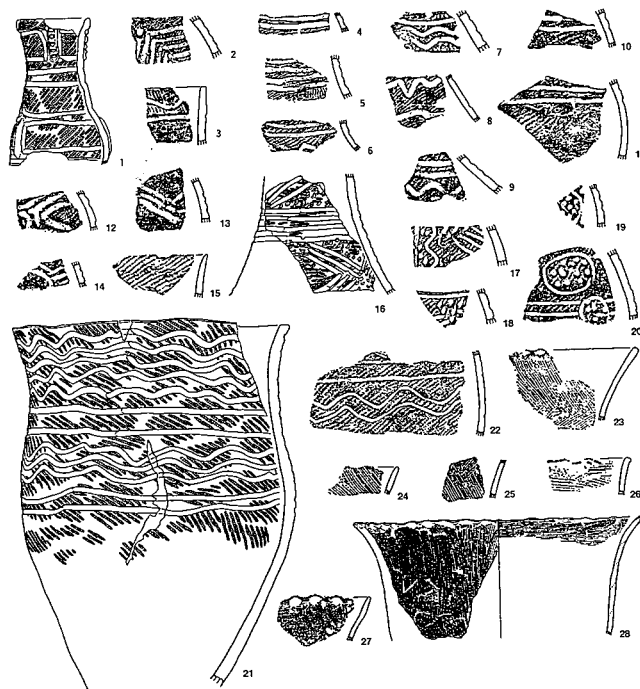
(1) 「須和田式」の視点

昭和10年、明治大学の杉原荘介氏らによる市川市須和田遺跡の試掘調査では、残念ながら断片的な土器しか出土しなかった。しかしその6年後に氏は千葉市新田山遺跡（杉原 1943）の調査で後に「完形を知りえたのは本資料の資料をもってはじめとする」（杉原 1961）と言わしめた壺形土器（おそらく第229図13）と巡り会い、これが「須和田式」の実質的な起点となったと考えられる。しかし、その後関東各地で昭和40年代までに「須和田式」と称した新発見が相次ぎ、現在では第229, 230図に見るよう最早、一つの型式名のみで解釈する状況ではなくなっている。そのため各地の研究者達は各地域の系譜を基に、新たな型式名で該期の土器を解釈し、現在に至っている。その一方で鈴木氏の主張をはじめ（鈴木 1984他）、最近では石川氏（石川 1996）や渡辺氏（渡辺 2001）の論考を機に「須和田式」は消滅し、「須和田遺跡」の内容や位置づけについても言及されることは無くなりつつある。したがって現在あえて「須和田式」「須和田期」を使用するのであれば、むしろその根拠を具体的に提示しなくてはならない。寂寥たる須和田式であるが今少し紹介すると、須和田遺跡出土資料において、壺形と甕形を合わせた「標準資料」は現在でも確実には見いだせない。1968年の「弥生式土器集成本編2」の段階においても「須和田遺跡の一部と新田山遺跡の一部」を合わせて「須和田式」とするなど、須和田遺跡の資料的限界が露呈され、「新田山遺跡」への依存を高めている。しかし、その新田山遺跡からは逆に甕形の良好な資料は出土しておらず、かつ後述するように時期的な疑問も見られるため、混乱が生じた。杉原氏はその後、甕形については第228図21の他には、埼玉県池上遺跡や千葉県岩名天神前遺跡等に求めていったことから、混乱に拍車がかかったと見ている。現在「須和田遺跡」資料は渡辺氏を中心とした千葉県史編纂の考古部会により整備され、編年的には中期中葉でも「池上式土器に対応されるもの」（渡辺 2001）としての位置づけがされ、多くの理解を得ていると思われる。

(2) 周辺遺跡の出土土器

縄文時代晩期から弥生中期前葉、中葉にかけては、地域的にも特に多くの研究者達が土器型式や再葬墓等を中心に論が交わされている。筆者がこうした中に加わる能力も無いことは百も承知であるが、失礼を顧みず論を進めたい。なお、第229～230図に紹介した遺跡は羅列にすぎず、学史的に重要な遺跡をすべて含んでいる訳でもない。また、示した土器も断片的であり、その遺跡を象徴しているとは言えないため、あくまで参考資料とさせていただきたい。

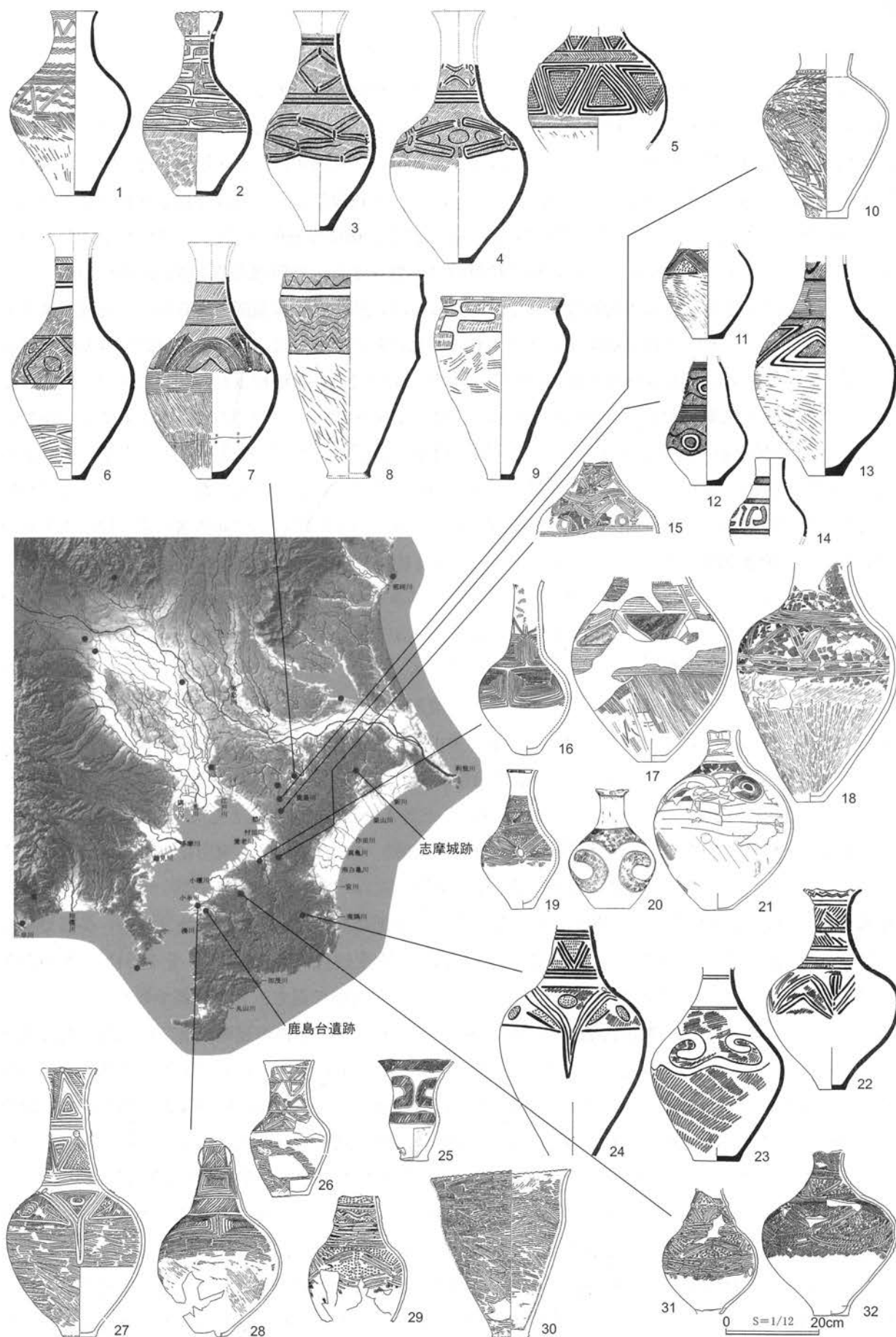
弥生時代「中期前半期」を初頭～中葉ま



第228図 須和田遺跡出土中期弥生土器
（渡辺 2001より転載）S=1/6

での範囲とし、まず県内の主な遺跡を概観する（第229図）。**常代遺跡**（甲斐 1996）（25～30）は小糸川流域の低地に位置し、「須和田期」（中期中葉）に位置づけられた四隅陸橋型方形周溝墓群が発見された。複数の墓域の変遷や（第235図参照）SD-220（旧河川跡）からの一括遺物に注目が集まった。27は3段の文様帯を有し、三角連繫文内部は刺突文が施されている。平沢式新段階の城ヶ島式に比定され（鈴木 1984）29は菱形連繫文内部を刺突するもので「出流原式か池上式か」微妙な判断（石川 2001）がされたものである。いずれにしても中期中葉の中でも新相の位置づけが提示され、方形周溝墓の開始時期について、甲斐氏の分析からさらに進んだ編年の細分がなされている。28の凸帯、29の頸部の膨らみには出流原式系を指摘するべきであろうが、条痕が胴下部に多用される常代遺跡の細頸壺は、比率的には27にみる平沢式系が多い感がある。また、25は北関東方面の筒型土器の搬入品の可能性も指摘され（石川 2001）、池上式に共通する。26も平沢式新相であろうが利根川中流域の広口壺の影響はないのであろうか。北関東の系譜の存在は武士遺跡20や船子遺跡23にも共通する。**船子遺跡**（渡辺 1970）には27と酷似する壺形24がある（出土遺構等は不明）。棒状工具の沈線区画構造は常代遺跡に共通するが、条痕が存在せず、破片を含めると渦巻縄文及び磨消縄文に野沢2式もしくは貉式（小玉 2004）（第230図17）の北関東系譜の優位性を強調しておきたい。**武士遺跡**（加納 1996）は4基の再葬墓を検出した遺跡である。17、21の横位文様について、報告者の加納氏は「集合凹線」と表現しているが、基本的には平沢式に特徴的な横位条痕文の系譜を想定すべきではないか。一方、18、19の胴下部には条痕文が施されず縄文が胴中位の横位区画文下側のみに施文され、天神前遺跡4等も含め、出流原式に共通する。なお、20、21は小形の鉢形を伴って同一墓坑から出土していることは興味深い。なお、渡辺氏は出流原式系壺形についてはいずれも「出流原式後半」とし、20の野沢2式が21の平沢式と共伴する事実を重視し、野沢2式が遡る可能性を示唆している（渡辺 2005）。**向神納里遺跡**（稲場 1995）の方形周溝墓出土の31、32は頸部の形状が明らかではない。特に31は頸部形状は出流原式的と言えようが、3段文様構成や刺突文への構造変化として（鈴木 1984）平沢式の新相を見るべきなのであろうか。**西国吉遺跡**（蜂谷 1999）では15をはじめ壺形にはすべて条痕が認められないと報告されているが、それを新相と見るか、系譜の違いと見るかは断片的資料からは不明である。**南屋敷遺跡**（梁瀬 2001）10は再葬墓から出土した壺形で頸部に凸帯が巡る。胴部地文は粗い条痕でその上を綾杉状の沈線文が施されている。第230図18の殿内式（弥生時代前期末葉）（小玉 2004）に類例があり、渡辺氏は中期前葉に位置づけられている（渡辺 2005）。千葉県で最も古い再葬墓であろう。

11～14が学史的にも著名な**新田山遺跡**（杉原 1943）である。11は櫛描の連続山形文の内部に刺突文を施してある。14の壺を含め千葉寺町出土土器（杉原 1968）として紹介されたものに近似する。千葉寺町の資料は、最近「中野台遺跡」として新たな報告がなされている（白井 2005）。（なお、鈴木氏は中野台遺跡については「王子台遺跡」の壺形の分析から、新田山遺跡直後で「須和田式直後」（鈴木 1984）と位置づけられている。）白井氏の報告では新田山遺跡は小田原式古式、中野台遺跡が新式と区分されている。こうなると当初「須和田式」の標徴ともされた新田山遺跡にはかなり時期差を有する土器が混在していたことになる。特に不明瞭なのは13であり、「千葉市史資料編」では頸部は比較的短径で復元実測されており、胴下半部や頸部無文帯部の調整記載（条痕の有無等）も明確でない。しかし、長頸の可能性もあり、渡辺氏の記載（渡辺 2005）では明確に条痕文とされており、平沢式の解釈となる。再度検討したい。1～9は弥生時代の「再葬墓」が初めて命名されたことで著名な**天神前遺跡**（杉原 1974）である。渡辺修一氏から「個々の土器に個性がありすぎて」という指摘（渡辺 1988）があるように、以前から系譜の複



第229図 弥生中期前半期の土器 (1) (千葉県内)

1～9 岩名天神前遺跡 10 南屋敷遺跡 11～14 新田山遺跡 15 西国吉遺跡
16～21 武士遺跡 22～24 船子遺跡 25～30 常代遺跡 31～32 向神納里遺跡



第230図 弥生中期前半期の土器 (2) (千葉県外)

1～5 須釜遺跡 6～9 池上遺跡 10, 11 小敷田遺跡 12～16 出流原遺跡
19, 20 遊ヶ崎遺跡 21～25 平沢北開戸遺跡 26～28 中里遺跡 (第Ⅲ)

雑さが強調されている。2の変形工字文と付加条縄文を有する壺形が「天神前式」と標徴的に規定されたり(杉原 1984)、1の岩櫃山式系譜の櫛描波状文、9の甕形の磨消縄文等、北関東の東西各地域との接点が見出されている。7の条痕文を有する壺形は鈴木氏によって客体的な「1例」とされた「葉脈文」を有する平沢式である(鈴木 1984)(第230図25)。8は野沢Ⅰ式として位置づけられている(鈴木 1982)。須和田遺跡出土甕形(第228図21)や野沢Ⅱ式が「出流原Ⅲ式」(鈴木 1982)の出現に連なるのに対比させた野沢Ⅰ式の具体例と言えようか。この他、野田市**勢至久保遺跡**(飯塚 1982)(再葬墓)は池上式併行(鈴木 1984)として編年的にも極めて重要であるが、紙面の都合で掲載できない。市原市**小谷田八木遺跡**(藤崎 1983)(再葬墓)も合わせ詳細は原典を参照していただきたい。61基もの再葬墓群の発見で有名となった多古町**志摩城跡**は近刊予定である。荒井氏は「Ⅰ基を除きⅡ期ないしはⅢa期(出流原期)で・・・Ⅱ期は肩の張る壺形で羽状条痕文が施される・・・弧状や波状も見られⅢa期はX字や円形の平沢型、三角連繫文や山形文の出流原式、磨消縄文による渦巻文の南御山Ⅰ式、擦消や充填疑縄文による渦巻文の野沢Ⅱ式、工字文の所謂天神前式・・・」との中間発表をされている(荒井 2005)。

また、中期初頭に位置づけられる資料が常代遺跡他四街道市**池花南遺跡**(渡辺 1991)(第231図)から出土しているが、詳細については本稿では省略したい。

県外の主な遺跡を概観する(第230図)。**殿内遺跡**では前述した南屋敷遺跡出土土器に見られた頸部凸帯が型式要素として示されている。小玉氏によれば荒海式とほぼ同じ分布範囲で継続し、弥生前期末葉として紹介されている(小玉 2004)。野沢式の渦巻縄文が千葉県南部地域まで分布範囲を示すのに対し、谿遺跡17に見る無文渦巻文は船子遺跡例(第229図23)を除き確かな出土例は不明である。**平沢北開戸遺跡**(亀井 1961)(石川 2001) 21～25は所謂「平沢型」(関 1983)の細頸球胴の条痕文壺である。なお、本稿では「式」に統一するが「型」とする根拠は原典を参照いただきたい。胴下半部の全面条痕を基調とし、上半部に縄文と横走条痕文を併用することが特徴である。刺突文の有無が「出流原型」との対比的区分要素とされたが、「充填刺突文」は平沢式内の型式変化との見方がある(鈴木 1984)。出流原型との系譜の混在から「平沢・出流原系」という呼称も使用されているが、頸部の横走条痕文の後退、消滅や頸部の長伸化は、石川氏も「平沢式の新相」と主張する(石川 2001)。その具体例が19～21の城ヶ島の遊ヶ崎遺跡(杉原 1968)で、古くは「須和田式」(神沢 1966)と提示された壺形20と甕形19が著名である。但し鈴木氏は甕形に見る「波状櫛目文帯」等の出自から平沢式の範疇とせず、城ヶ島式として明確な切り離しを主張されている(鈴木 1984)。**中里遺跡**は古くから明治大学による発掘が著名であるが(杉原 1959)現在では宮ノ台式と平沢式の間を埋め、相模地域における「池上式併行」の型式として提唱、資料提示されている(石川 1996, 2001)。但し完形品として把握される資料は、第Ⅲ地点の26～28である(呉地 1997)。平沢式、城ヶ島式とは大きく異なる広口の壺形27も特徴であるが、石川氏が最も強調されたのが濃尾平野の貝田町式や瀬戸内方面に繋がる「ハケメ」手法の導入であり、宮ノ台式への橋渡しである。

北に目を移すと、再葬墓群として歴史的に著名な**出流原遺跡**(杉原 1984)がある。出流原式は中村五郎氏(中村 1972)以後、「平沢式との論理和」(鈴木 1984)をもって「須和田式」に代る位置づけが確立している。出流原遺跡の多くの土器は、平沢式の新しい時期に併行する編年観があり(石川 1996)。当初から女方式の系譜が主張される他、第229図2の天神前遺跡に共通する壺形も出土しており、印旛沼から北関東東部地域一円の繋がりも確実である。14の人面土器や12のような(頸部の凸帯も含めた)膨らみある頸部や刺突文が特徴的である。地文の縄文はその直下位置で切られ胴下半部に及ぶことは無い。16は

	相模	埼・群／栃	
弥 生 時 代 中 期	堂 山	1 期	前 組
	平 沢 城 ケ 島	2 期	上 敷 免 出 流 原
	中 里	3 期	池 上 小 敷 田
	宮 ノ 台	竜見町	4 期 御 新 田

石川日出志 1996

「東日本弥生中期土器型式編年表」一部抜粋

(3) 鹿島台遺跡再葬墓 (SK-13) 出土土器 (第26図 1～3)

1～3については既に渡辺修一氏によって公表されている (渡辺 2004)。したがって詳細な説明は原典を参照していただきたい。なお、以下の説明の内『 』は渡辺氏の文章をそのまま引用したものである。1は器高53.8cm, 口径9.8cm, 胴部最大径26.7cm, 底径4.3cmを計り, 胴部中位に補修孔と思われる焼成後の穿孔が2カ所ある。全体的に茶褐色を呈し, 器面は荒れている。胎土に白色小石を多量に含み焼成は不良である。底部整形は不明。『口縁部と頸部中位に縄文帯, 頸部に2段の横位条痕帯, 肩部に主文様帯が』施されている。主文様は『V字状とI字状の区画に条痕を充填し, 間に刺突文を伴う円形区画を加える。胴部下半には斜位の条痕』があり『文様帯区分が平沢型土器の特徴をもっているものの, 平沢型土器の祖形に対して忠実でない部分もある』とされている。条痕原体は貝殻を用いたようであり, 頸部凸帯を含め, 出流原式の系譜が強調されようか。結論としては『出流原式古段階』の位置づけがされている。なお, 2段の横位条痕帯が存在するものの, 器面が荒れており, 本来的な条痕の深さ等も不明である。ほぼ消滅しているとすれば平沢式の範疇では新相と言えようか。

2は器高64.8cm, 口径10.1cm, 胴部最大径34.0cm, 底径7.1cmを計る。全体的に黒褐色を呈し1に比べると器面は荒れていない。胎土に小石を少量含み焼成は比較的良好である。1と比べ材料粘土の質が明らかに異なる感がある。縄文が充填されていない部分は器面の磨き上げが見られ, 底部辺部まで条痕文が及んでいる。『口縁部から肩部までを地文として縄文を施し, 太い沈線による重四角文を3段目には刺突文を伴う。胴部最大径付近は横位の条痕, 胴部下半部は斜位の条痕であるが後者には縦位の羽状条痕が意識されているのは疑いない』とされている。主文様は常代遺跡28に類似し, 出流原式に原型を見いだすものの『特に縦位の羽状条痕は西関東的』といえる。また, 頸部に3段の同じ区画文様があり, 条痕文が施されずに縄文が充填されるのを「条痕文の消滅」と見るならば, 遊ヶ崎遺跡20に共通し, 平沢式新相 (もしくは城ヶ島式) となる。結論として『基本的には出流原型であるが・・・ (平沢型との) 折衷型』とされた。なお, 2の胴下半部の条痕文が, 上敷免遺跡での関氏の指摘にあった「平沢型の端部のそろった条痕」(第232図) (関 1983) なのかは判断できない。

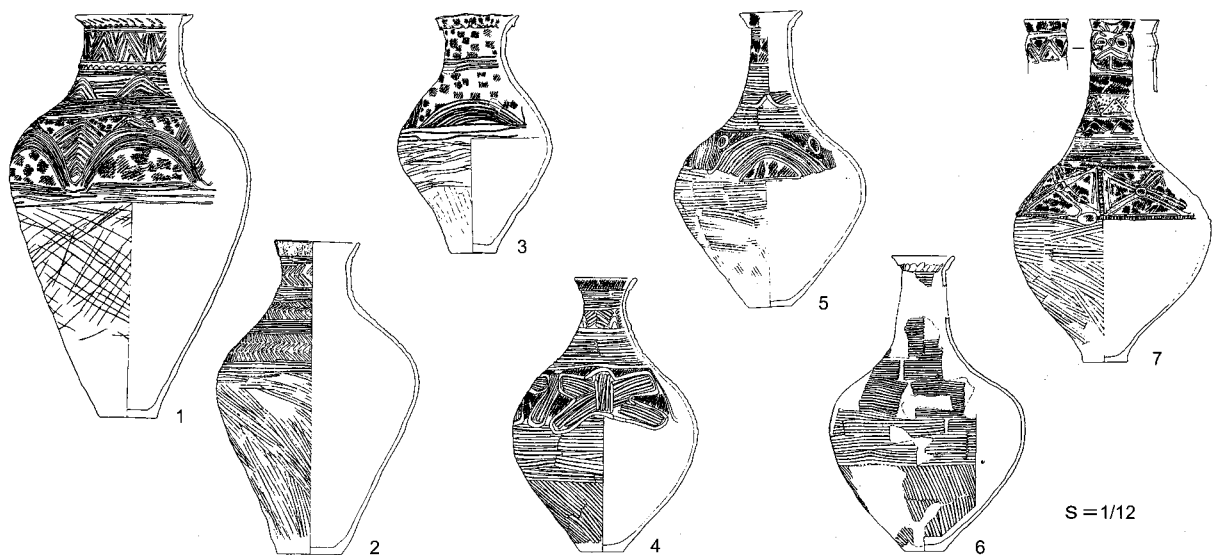
3は器高 (現在高) 44cm, 胴部最大径31.4cm, 底部径7.4cmを計る。全体的に茶褐色を呈するが一部赤みが強い。胎土に白色小石を含み, 焼成は不良である。底部辺部まで条痕文が及んでいる。『縄文を地文

とした上でX字状区画を主文様として間に1字状区画，X字の交点に円形文を配置する。主文様は頸部と肩部にあり，条痕が充填される。また，胴部下半はやはり斜位の条痕が施される。』3の主文様のX字状区画は第229，230図でも明らかなように平沢式～中里式，出流原式～池上式の時期に共通して定着しているが，3は条痕文による施文である。胴下半部の条痕文も含め，平沢式の範疇としたいが，渡辺氏は1，2と同様に「出流原式」の要素を指摘された。全体としては『出流原式古段階』の範疇において平沢式の型式属性を共有するという解釈は提示しておきたい。

なお，該期の参照資料としては，関氏の分析で著名な上敷免遺跡（出流原式直前期）を取り上げておくべきであろう（第232図）（関 1983）。1は「東海地方中期初等の条痕文系土器群が在地化した」とされる肩の張った広口であり，やや古式を示す。2は旧来「岩櫃山式」の範疇とされたものであるが，出土土器総体としては定形化した「平沢型の壺」（4～7）が多い（関 1983）。6のような全面条痕や4，5の頸部の横方向条痕文が明瞭に存在することは，鹿島台2，3とは基本的に異なる。但し，条痕使用による主文様の構成は類似している。また，7の人面は「上敷免3式」（鈴木 1984）とされ，出流原式の古段階に連なる。鹿島台遺跡についてもほぼこの時期に相当するのであろうか。

（4）鹿島台遺跡土坑（SK-20）出土土器（第27図1）

1は器高（現在高）19.0cm，最大幅14.8cmを計る。LR縄文が施された後，棒状工具による重三角連繫文が施され，間に刺突文が充填される。全体的に茶褐色を呈し，焼成は良好である。底部には布目痕が見られる。地文の位置，三角連繫文，刺突文はいずれも出流原式に見られる要素であり，特に文様構成及び大きさは第230図14の人面土器に共通する部分が多い。なお，14の人面土器は出流原遺跡での分析では第一類A類として「須和田式の初期」の位置づけがなされている。



第232図 上敷免遺跡出土土器

2，再葬墓と初現期の方形周溝墓について－鹿島台遺跡と常代遺跡－（その1）

（1）常代遺跡との年代的な対比（第235図参照）

鹿島台遺跡から小糸川を約2km下った沖積地に常代遺跡がある。ここから多くの方形周溝墓や土坑（墓）が検出された。「再葬墓」と初現期の「方形周溝墓」が同時期に検出されたとなれば，弥生時代を代表す

る墓制の研究に大きな進展をもたらすであろう。しかし、鹿島台遺跡の整理作業は、中核となる中期後半の集落跡の地区（B、C区）が未完了である。そのため本書に掲載した該期の方形周溝墓についても資料紹介にとどめている。今後分析を継続するため本稿を「その1」としておきたい。

まず、鹿島台遺跡の再葬墓（SK-20）が常代遺跡と年代的にどう対比されるのか触れておく。常代遺跡は甲斐氏によって墓域の変遷が示されており、各墓域（A～C）ごとに各時期が存在しているが、特徴的な状況を原文に基づき抜粋すると以下のとおりである。

- | | |
|-----------|---------------------------------|
| 1期 弥生中期前半 | 墓域B、Cで土坑墓 |
| 2期 弥生中期中葉 | 須和田式、墓域Aでは方形周溝墓（壺形が多い）主体。 |
| 3期 弥生中期中葉 | 須和田式最新、小敷田併行、墓域Bでは土坑墓（甕形が圧倒）主体。 |
| 4期 弥生中期後葉 | 宮ノ台式古段階、墓域Aで方形周溝墓継続 |
| 5期～8期 | 宮ノ台式～古墳時代前期（以下略） |

石川氏は2期を中里・池上併行期とし、中期中葉でも新相を位置づけている（石川 2001）。鹿島台遺跡の再葬墓（SK-13）及び土坑（SK-20）は、上記の出土土器型式観から判断すると2期に併行すると思われるが、そうすると石川編年では中里・池上併行期に含まれることになり、「出流原式古段階」とした鹿島台例との微妙な時期差が生じてしまう。これについては今後の検討課題としたい。いずれにしても常代遺跡で方形周溝墓が初現した頃、近接する台地上の鹿島台遺跡では未だ再葬墓がつくられていたことは間違いないと考える。その後、鹿島台遺跡で形成された方形周溝墓群は、宮ノ台式期古段階からあるようだがB、C区が現在整理作業中であるため、成果を待って言及したい。

（2）再葬墓の構造をめぐる諸問題

①再葬墓の周囲の遺構、遺物

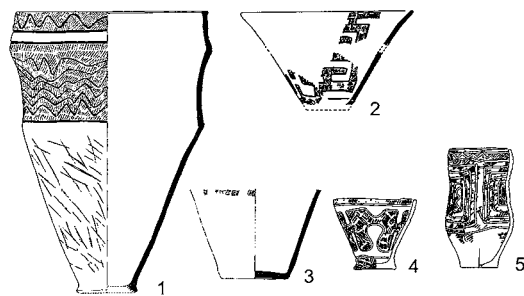
2004年の考古学ジャーナル12月特大号にて「再葬墓研究の現状と今後の課題」が発表された。縄文時代からの再アプローチや居住域を含めた空間的な復元を主とした新たな方向性であり、重要で優れた指針と言えよう。（石川他 2004）。常代遺跡の方形周溝墓との対比をする前提として、本稿ではこの指針に基づく「再葬墓の構造」に関して、僅かな情報であるが提示していきたい。

鹿島台遺跡では再葬墓SK-13は単独検出である。やせ尾根であるから当然なのか、と思ったが周囲の表採遺物を調べると縄文晩期から弥生中期中葉の土器片が確認できる。これらの提示は今後の報告に委ねざる得ないが、当該期の発掘調査においては、ローム層上位の包含層の存在に十分留意する必要がある。SK-13の場合、甕形を含む中期中葉の土器片及び石片が存在していたという情報もある。市原市の武士遺跡では再葬墓周囲に土器集中地点が存在している（加納 1996）。近年では須釜遺跡でも同様な状況がある（長谷川 2003）。このことは周囲にさらに複数の再葬墓が存在したか、性格の異なる（土器を伴う）遺構があったか、あるいは一時的な人間の滞在等の仮説も想定される。もともと再葬墓や土器棺（後期を含む）の発掘調査は、遺構確認面を上位で正確に捉えることは経験上難しい。ほとんどがはじめに土器の出土があって気付く場合が多い。またローム層に掘り込まれた土坑底面が周囲の遺構と比べても高位の場合がある。こうした県内の発掘例から、これらの葬法が意識的に地上に土器を露出させていたという仮説も成り立つことは、筆者も以前指摘したことはある（註1）。すなわち武士遺跡等の再葬墓周囲の遺物集中地点の存在は、石川氏らも指摘するように（掘り込みが無いが極めて浅い）何らかの遺構を伴っていた可能性はあり、これらを含めたトータルな再葬墓空間分析が今後必要であろう。

②再葬墓に見る器種と異系譜

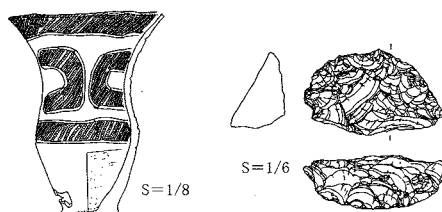
筆者が特に注目しているのは須釜遺跡での甕形等の出土例である（第235図）。これは再葬墓内から共伴する場合や周囲から出土する場合がある。いずれにしても「壺形への再葬」とは異質の「甕形等を必要とする」用途、空間が、再葬墓本体もしくは周囲に存在していたわけである。再葬墓は骨が壺形に収められるまでには当然のことながら複雑なプロセスがあったわけで、縄文時代の具体例やその伝統については既に指摘されているところである（設楽 2004）。しかし、弥生中期の再葬墓の構造については平沢式の細頸壺の多用、甕形の少なさ、周囲に散在する遺物、遺構の内容等に不明な点が多い。そうした中で須釜遺跡では再葬墓の新相段階（池上式古段階）における「壺形以外」の多さが注目され、それらが再葬墓周囲からも出土し、さらに甕形がすべて伏せられていたという特異な姿が見られたのである。

そこで須釜遺跡の類例を調べるために、時期的に前後する資料を第233図～第234図に示した。但しここには方形周溝墓及び「土器棺墓」と称せられる遺構等も含まれている。これらを見れば須釜遺跡とほぼ同時期の常代遺跡の「土坑」SK-463に同様な甕形の急増が見られていることが分かる。さらに気になるのは、常代遺跡では甕形において野沢式や北関東東部地域の系譜が目立つことである。この点については古く杉原氏が出流原遺跡における甕形について、壺形とは異なる女方式の系譜を指摘されている。また、利根川中流域では、平沢式の壺形土器が「岩櫃山式に共通の甕形土器と組成する」（渡辺 2005）状況があることも注目すべきである。もちろん、弥生時代中期前半期における関東各地域が、墓制とは関係なくこうした土器型式の複雑な合体、融合等を引き起こしていたことは周知されているものの、第233～第234図を見る限りは用途の異なる器種の利用の際に異なる系譜を顕在化させ、表現した可能性もあながち否定できない。なおかつそれは再葬墓に限らず、方形周溝墓や土坑においても共通していることに注目したい。常代遺跡の方形周溝墓SZ-63では壺形とは明確に用途が異なるもの＝石器（黒曜石石核）に北関東東部系譜の小形甕形（広口壺）が出土している。なお、石器の出土例は再葬墓においても類例があ

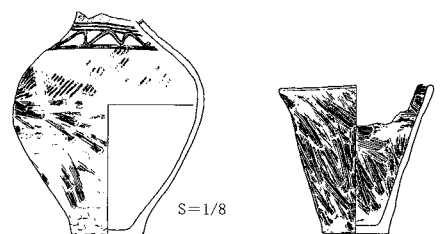


第233図「壺形以外」の一例（再葬墓）（中期中葉）

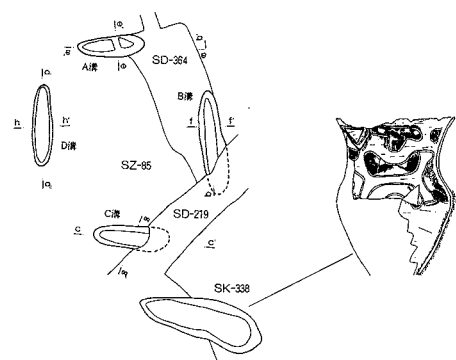
1. 天神前2号墓墳 2. 出流原37号墓墳 3. 出流原31号墓墳
4. 須釜8号再葬墓 5. 須釜7号再葬墓



（常代遺跡SZ63の甕形（広口壺）と石核）

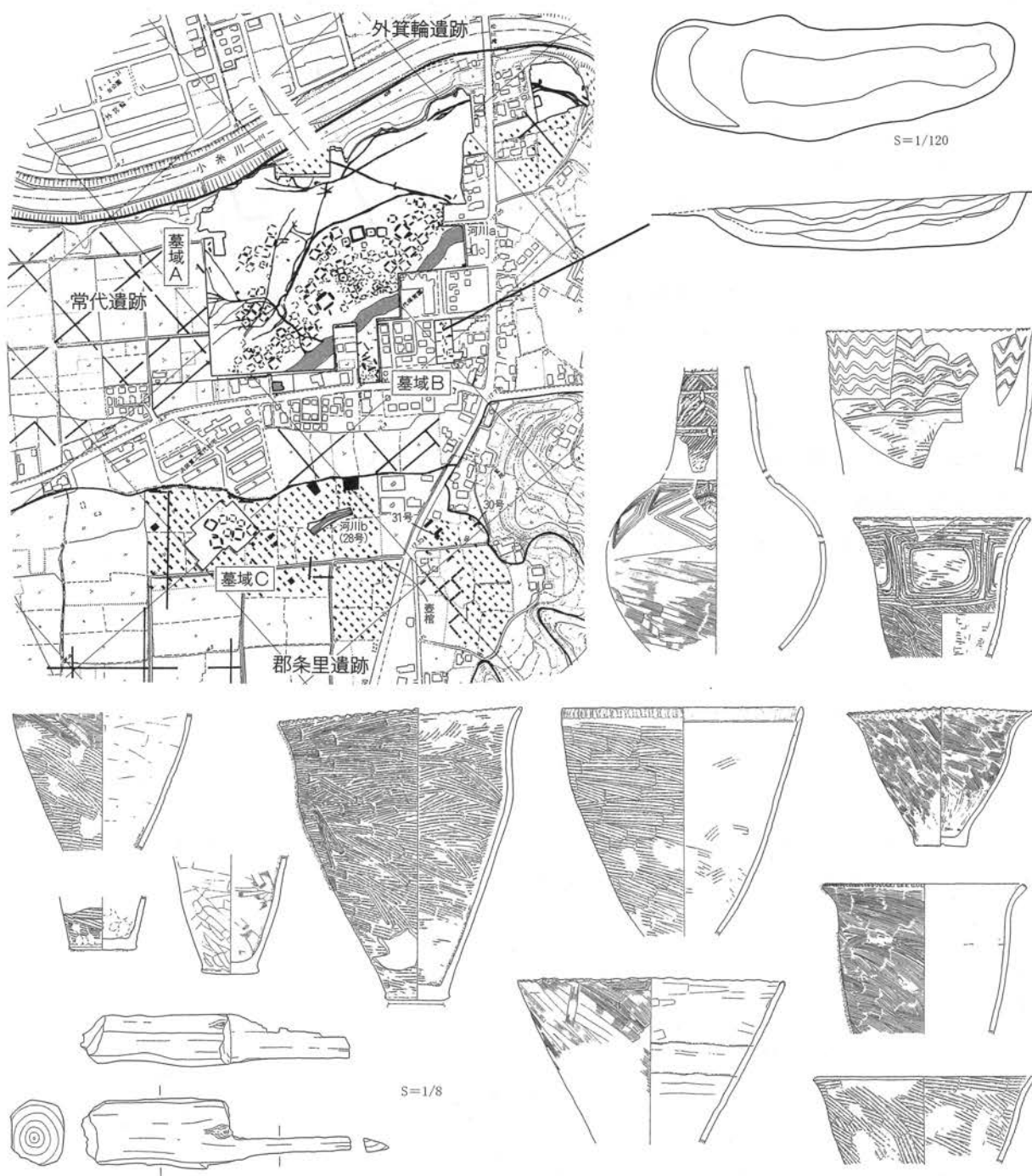


（常代遺跡SZ151の壺形と甕形（広口壺））



（常代遺跡SZ85に近接するSK338の甕形（広口壺））

第234図「壺形以外」の一例（方形周溝墓）（中期中葉）



第235図 「壺形以外」の一例（土坑）（中期中葉）常代遺跡SK-463

る（品川 2004）。SZ-85では隣接する「土坑」からやはり北関東東部系の甕形が出土している。以上について、現段階では断片的な資料ではあるがとりまとめると以下ようになる。

- ① 関東各地で弥生中期中葉の再葬墓において、細頸の壺形は主器として利用されたが、甕形や鉢形等の「壺形以外」の利用について、その用途は現状では明確でない。しかし壺形との出自の違いを表現した可能性もある。
- ② 「壺形以外」の利用については石製利器も含め、再葬墓の外部周辺を含めた一定の空間を想定すべきである。

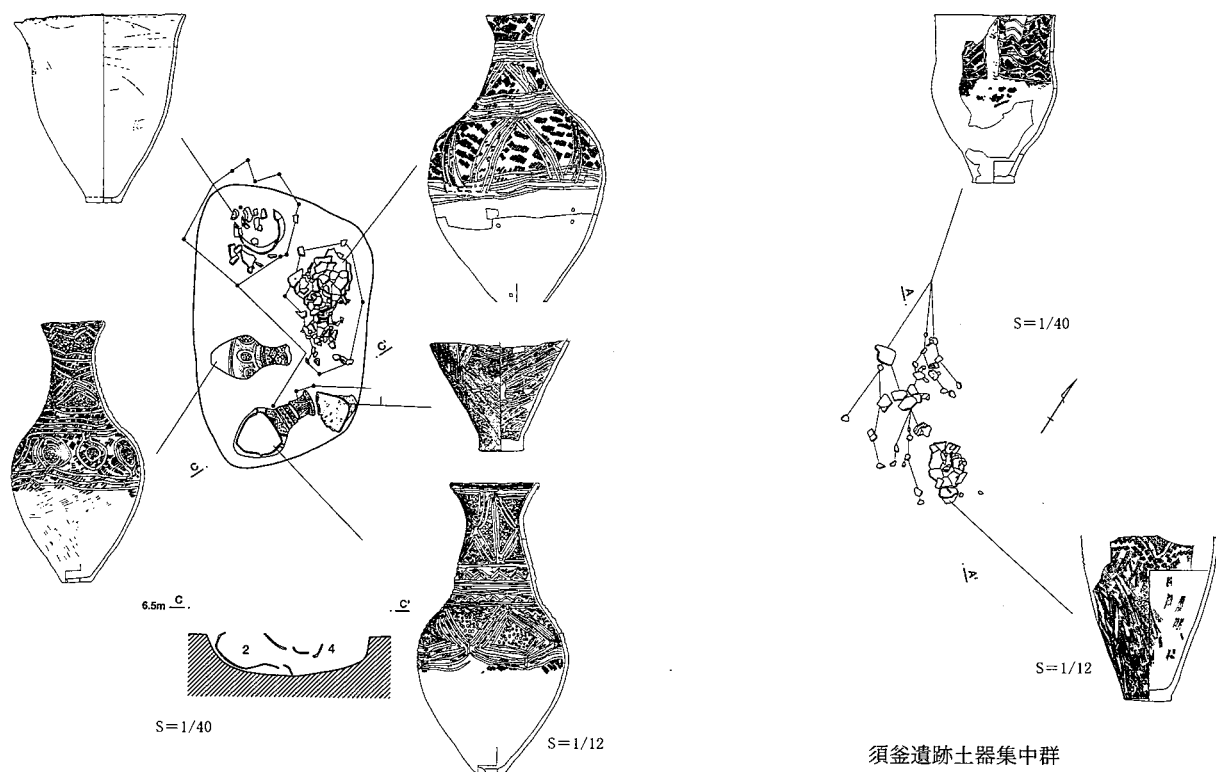
③再葬墓および方形周溝墓に共通して「壺形以外」の利用頻度は池上期にかけて共に高まる。再葬墓の隣に甕形のみ置く例（須釜遺跡）や方形周溝墓の隣に多くの甕形を集中させた土坑をつくる例（常代遺跡）が提示できる。

（３）再葬墓と方形周溝墓の共通要素とその後の展開

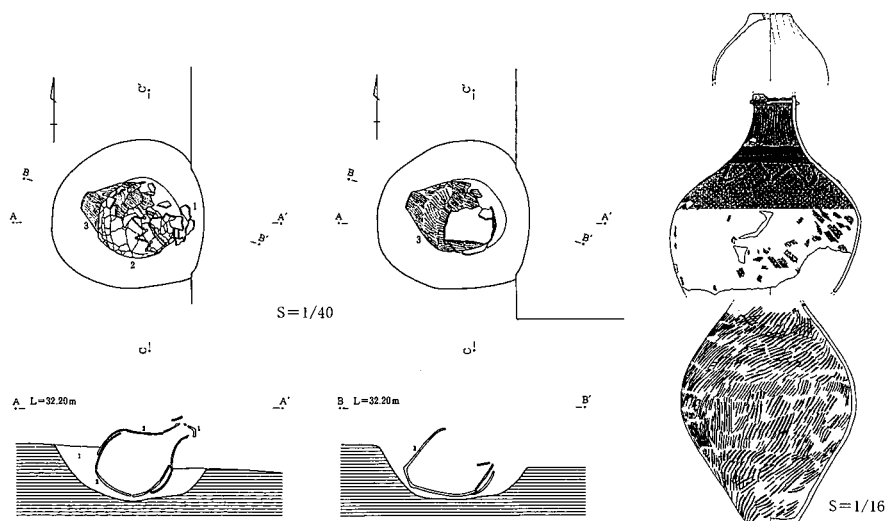
前項では再葬墓と初期の方形周溝墓の共通要素が一部指摘された。さらに常代遺跡では土器の出土状況における共通性が話題となった。第229図27, 28等の中期中葉の方形周溝墓の溝からの出土であるが、溝の端部に偏ってまとまって重なるように出土しており、あたかも再葬墓の如くである（春成 1993, 石川 2001）。なお、この状況は小敷田遺跡でも共通する。同様に土坑（SK-463）の形状もまた方形周溝墓の溝の形状に近い長円形であることにも注目しておきたい。今後、再葬墓と初現期方形周溝墓の資料の分析の深化により、当時の異なる2つの墓制の中に見られる「共通要素」をより具体化できると考えている。この点は本報告書の続編での課題としたい。

再葬墓は現在のところ、従来編年で言う中期中葉「須和田式」を象徴してきたもので、その後の中期後半宮ノ台式期では「土坑墓」や「土器棺墓」と報告される遺構が多い。一方で方形周溝墓は継続的に飛躍的な分布の拡大と展開を見る。では再葬墓は関東各地からどのように姿を消したのであろうか。当然のことながら「土坑墓」や「土器棺墓」はそれぞれが内容的に同質一括できるものではなく、中には再葬墓との関連を十分指摘しなくてはならない様相のものも含まれている。須釜遺跡例を再葬墓とは呼ばず別の視点から見る研究者もいるようであるが、県内でも印旛沼周辺地域の成田市南羽鳥タダメキ第2遺跡では、細頸の壺形と「壺形以外」に整形（再利用）した土器が共伴し合口構造の「土器棺墓」と報告されて注目された（第236図）。ここでは「再葬墓」という断定は避けている。しかし注目すべきは二者の土器系譜が明確に異なり、一方は北関東東部地域に繋がっていることである（酒井 2002）。この現象については、断片的ではあるが、前述してきたように関東各地の再葬墓の初現から中期中葉後半にかけて見られた繋がりの中に見いだすことができよう。

再葬墓は一般的には方形周溝墓の分布の拡大、展開とともに姿を消すと思われる。しかしタダメキ遺跡のある印旛沼周辺地域においては、弥生時代中期後半以降、西上総地域とは明確に異なり方形周溝墓が忽然と姿を消していることを強調したい。これらの状況は拙稿に紹介したが（加藤 2004）、北関東東部地域の系譜を維持した当地域では、伝統的な墓制が弥生時代当初から中期後半まで継続的に営まれていたことが想定できる。すなわち地域によっては中期後半の段階でも系譜的には「再葬墓」に繋がる「土器棺墓」が存在していたことを指摘しておきたい。今後は名称の問題や方形周溝墓の展開との関連について分析を深化させるべきであろう。



須釜遺跡3号再葬墓



第236図 「壺形以外」 の一例 (再葬墓, 土器棺) (中期中葉～中期後半)

引用文献

- 飯塚 博和 1982 『野田市半貝・倉之橋・勢至久保』 野田市教育委員会
 石川日出志 1996 『東日本弥生中期広域編年の概略』 Y A Y ! 弥生土器を語る会
 2001 「関東地方弥生時代中期中葉の社会変動」 『駿台史学第113号』 駿台史学会
 2004 「再葬墓研究の現状と今後の課題」 『考古学ジャーナル12月増大号』
 市川市史第1巻 1971 「原始農耕文化－弥生時代－」 市川市史編纂委員会
 稲場昭智他 1995 「向神納里遺跡」 『大竹遺跡群』 (財) 君津郡市文化財センター

- 大島 慎一 1997 「小田原地方の弥生土器研究に関する覚書」『小田原郷土文化館研究報告33』
- 甲斐 博幸 1996 『常代遺跡群』 君津郡市考古資料刊行会
- 加藤 修司 2004 「印旛沼周辺地域における方墳の出現と展開」『研究紀要3』（財）印旛郡市文化財センター
- 加納 実 1996 『市原市武士遺跡』 財団法人千葉県文化財センター
- 亀井 正道 1961 「神奈川県秦野氏平沢遺跡の土器」『弥生式土器集成 資料編2』
- 神沢 勇一 『日本の考古学3』 河出書房
- 呉地英夫他 1997 『中里遺跡第Ⅲ地点発掘調査報告書』 小田原市教育委員会
- 小玉 秀成 2004 「霞ヶ浦の弥生土器」『平成16年度特別展』 玉里村立史料館
- 酒井 弘志 2002 「成田市南羽鳥タダメキ第2遺跡」『南羽鳥遺跡群Ⅳ』（財）印旛郡市文化財センター
- 設楽 博己 2004 「弥生再葬墓における縄文文化の伝統」「再葬墓研究の現状と今後の課題」
『考古学ジャーナル12月増大号』
- 品川 欣也 2004 「弥生再葬墓と同時代遺物集中区」「再葬墓研究の現状と今後の課題」
『考古学ジャーナル12月増大号』
- 白井久美子 2005 「千葉市中野台遺跡・荒久遺跡（4）」『千葉寺地区埋蔵文化財調査報告Ⅴ』
（財）千葉県教育振興財団
- 杉原 荘介 1943 「下総新田山遺跡調査概報」『人類学雑誌58巻7号』
- 1961 「神奈川県小田原市中里（鴨の宮）遺跡（Ⅰ）・（Ⅱ）」『日本考古学年報8』
- 1961 「千葉県千葉市坂月新田山遺跡の土器」『弥生式土器集成 資料編2』
- 1968 「南関東地方」『弥生式土器集成 本編2』
- 1974 『佐倉市岩名天神前遺跡』 明治大学
- 1984 『栃木県出流原における弥生時代再葬墓』 明治大学
- 鈴木 正博 1982 「出流原抄」『利根川3』 利根川同人
- 1984 「王子台」の頃』『利根川5』 利根川同人
- 関 義則 1983 『上敷免遺跡』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 千葉市史資料編1 1976 「弥生時代」 千葉市史編纂委員会
- 中島 宏他 1984 『池守・池上』 埼玉県教育委員会
- 中村 五郎 1972 「野沢1式土器の類例とその時代」『小田原考古学研究会会報2』
- 長谷川清一他2003 『須釜遺跡』 埼玉県庄和町教育委員会
- 春成 秀爾 1993 「弥生時代の再葬制」『国立歴史民俗博物館研究報告第49集』
- 蜂谷孝之他 1999 『市原市西国吉遺跡』（財）市原市文化財センター
- 蛭間真一他 1978 『上敷免遺跡』 深谷市埋蔵文化財調査報告書 深谷市教育委員会
- 藤崎 芳樹 1983 「市原市小谷田八木遺跡の弥生式土器」『研究連絡紙3』（財）千葉県文化財センター
- 梁瀬裕一他 2001 「南屋敷遺跡」『千葉市源町遺跡群』（財）千葉市文化財調査協会
- 吉田 稔他 1991 『小敷田遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 渡辺 正吾 1970 「大多喜町船子遺跡の新事例について」『総南文化12』
- 渡辺 修一 1988 「房総における弥生時代墓制」『東日本の弥生墓制』 第9回三県シンポジウム
- 2001 「須和田遺跡雑感」『千葉県史研究第9号』 千葉県
- 1991 「池花南遺跡」『内黒田遺跡群』 財団法人千葉県文化財センター
- 2005 「第Ⅱ部資料 土器の変遷－弥生土器－」「遺物・遺構（4）壺棺再葬墓」
『千葉県の歴史 資料編 考古4』
- 註1 加藤修司 平成16年度 千葉県法人連絡協議会共同研修会での事例発表 平成16年10月